

NO. 48  
March '10

# Newsletters

神戸女学院大学  
女性学  
インスティテュート

## 女性学インスティテュートの四半世紀を 振り返って

原 田 園 子

1984年に、神戸女学院大学は当時のアジアのキリスト教主義9女子大学によるAWI (Asian Women's Institute) への加盟の検討を始めました。そのために“女性”を研究対象とする機関を要するということから、大学研究所の下部組織としての女性学インスティテュートが1985年4月に開設され初代ディレクターとして英文学科教授(当時)高瀬ふみ子先生が就任されました。きっかけは、既に加盟校であった東京女子大学から日本におけるもう一校として、本学へ参加の打診があったことから始まったとかがっております。デフォレスト館三階の一室が充てられ、新規に採用された教学職員が、順次書籍を整え、管理やAWIとの連絡業務等に専従されました。これに先立つ1985年の年明けに開催されたAWI創立10周年記念大会(開催地香港)での学長会議に高瀬先生も同行され、そこで本学を含む5大学の新規入会の承認を受けました。三年後のサラティガ(インドネシア)会議にも学長、ディレクターが出席される等、AWI関係の活動が活発におこなわれており、1991年会議の主催校は本学がお引き受けすることになり、秋には環境問題と女性をテーマとして教育会議、学長会議、執行委員会が関西学院千刈セミナーハウスを会場として一週間に亘って開催されました。お手伝いと幾つかの教育会議の分科会・討論に私も参加させていただきました。

この会議への本学の教員と学生達の参加を契機として、AWI関係における本学の位置づけと問題意識がインスティテュート所員そして全学的にも認識され、この時の議論の成果を踏まえ、更なる研究と実践へと運んでいく方向性が明らかにされたように思いました。

しかし、AWI本部の運営活動が1994年の執行委員会を最後に低迷し、何年後かの加盟校の意向調査を経て、活動停止・解散となってしまいました。資金援助を得ていた一在米団体の事情もあり、また同じアジアといえども各国内の経済・社会における格差の現実と国情の違い、そして何よりも“女性”に関わる問題意識の差異等による、国を越えての連年りの難しさがあったように思います。この点は、先の会議における

議論に参加した折に痛く感じたことでもありました。

一方、本学における女性学インスティテュートの活動は、新たなメンバーを次々と得て、移り行く世相における女性の問題はもとより、男女を包括する人間としての権利に関わる議論や研究が活発になされ、その意識を教員間にとどめず学生達にも共有してもらうべく授業科目や教育プログラム、そして学生懸賞論文が置かれました。また、この間“女性学”という名称を再考し、インスティテュート名には本来我々が目指しているところの人間間・人間社会の平和を冠すべきだという提案もありました。しかし、当時の運営委員会において、いずれそうなるべきではあろうが社会的現実においては時期尚早であろうということになったわけです。

女性学インスティテュートが開設されて早25年も経つこととなります。キリスト教主義女子大学である本学における女性学の研究と教育の基づくところは、キリスト教の人間観である、神の前においては人格として男女は平等で対等であることの認識であり、共生・協働・協調社会一従って隣人愛と平和一を目指すものと思います。学生達にはリベラルアーツ&サイエンスと国際・異文化理解の枠組みの中で、女性としての自らの人生を通して社会にかかわることの意味を考え、様々な問題に対してそれを克服し解決していく意識と精神力を得させるものであろうと考える次第です。

(元学長、文学部教授：英語学、英語科教育法)

## 学外講演会で講演を行なって

【第1回：2009年10月8日】……………張野宏也  
●「水を考える」

日本は水が豊富であると思われているが、人間が利用できる水はわずかであり、いつかは水不足を招きたいへんな事態に陥る。それを回避するには、貴重な水資源を大切に使用し、汚さないように心掛けていかなければならないという内容について、具体例を盛り込んで講演を行った。

はじめに、雨として地上に落ちた水は河川、海域へと流れ、その後蒸発して雲となり再び雨となるというように、水は循環しているもので水量の増減はないこ

とを述べた。そして、海域等を含めると地球上には、水が138億 m<sup>3</sup> 存在するが、人間が利用できる水はその2.5%にすぎないこと、食品を作る場合その材料を飼育および栽培することを考えると、予想以上の水が必要であるということ（バーチャルウォーター）について説明を行い、総合的に考えると日本は水の輸入国であることを確認した。次に、淡水資源として重要な河川水について、それを汚しているのは生活排水が主な原因となっており、とくに、台所からの排水は川の汚れを悪化させるので、油などは拭き取り分別できるものはゴミとして捨てることを促した。さらに、河川水から水道水を作る処理、水道水の安全性、浄水器の材質と特徴について解説した。また、人間が使用した排水は下水道処理で汚染物を除去した後、河川、海域に放流しているにもかかわらず、海域が人間の作った化学物質により、内分泌かく乱作用をはじめ、異変がおこっていることについて説明した。

この講演は、中止になることも危惧されるような台風の当日に行なわれた。しかし、約20名の方々にご来場していただき、活発な質問や有益なコメントをいただいた。演者自身もたいへん勉強になったひと時であった。（人間科学部教授：環境科学）

【第2回：2009年11月11日】……………三宅志穂

●「女性のためのフィールドサイエンス体験案内  
—自然に出会うイギリス小旅行—」

私が11月11日に行った学外講演会での講演タイトルは、「女性のためのフィールドサイエンス体験案内—自然に出会うイギリス小旅行—」でした。講演では、イギリスのフィールド・スタディーズ・カウンシル（Field Studies Council: FSC）の紹介を行いました。FSCは1943年に設立された教育慈善団体で、英国各地においてフィールドセンターと呼ばれる野外学習施設の運営を行い、人々にフィールドサイエンスの手法による野外学習プログラムを提供しています。現在、FSCは17のフィールドセンターを所有する民間機関として運営されています。

講演でのお話は（1）FSCの概要とフィールドセンターの特色、（2）一般向けプログラムと児童・生徒向けプログラムの紹介、（3）お勧めのフィールドセンター、という流れで進めました。本講演中に使ったスライドには、私が研究生時代から修士生であった時期に、FSCフィールドセンターを訪問し、入手してきた

<P.3に続く>

## 夢の光明

島崎 徹

最近学生達を見ていて、ふと気になったことがある。それは、今彼女達はここで自分が学び、追及しているとうと決めたものの先に何らかの自分なりの夢やヴィジョンをもっているのだろうかということだ。大学卒業後の進路や就職率が取り沙汰される中で、彼女達は大学というところに参加していること、そこで自分の好きなことをしているということに満足しているだけの人間になってはいないだろうか。大学というところは人生の目的にはなりえないのだ。大学で4年間を過ごしたことで満足してしまうのであれば、ここまで支えてきた親はたまったもんじゃない。大学という場所で学んだ専門分野を職業とし、生計をたてることだけがすばらしいなどといっているわけではない。何かの縁で出会い、自分の気持ちがこれを学んでみようという傾いたその物事に、自分なりのイメージとヴィジョンを混ぜ合わせる。そして、そこから生まれてくる肯定的なエネルギーは、人が苦しいと思うことも苦しいとさえ感じない自分を発見させてくれる。そのスキルが、これから進んでいく人生の全てに活用できるのだという、学び本来の姿を修得するところに至って始めて大学という場の参加が自身にとって意味あるものになるのである。私はそのことを、私が専門とする舞踊というものを通して感じてもらいたいのである。

多くの人は「夢ばかり追いかけていないで現実をしっかりと見つめなさい」と言うが、これは、夢というものは達成できなければ意味がないと思っているからである。そして一方では「夢ばかり追いかけるな」と言われて当然だと納得してしまう人が大勢いることも事実である。その人達は夢がただの夢という域を脱しておらず漠然としていて、そこに到達するための過程が欠如しているのである。この両者に共通しているのは夢を持つことによって自然に養われるであろう学びの姿勢そのものがその人の人生にとって夢の達成よりも価値があるという怪我の功名ならぬ、夢の光明に気付いていない点である。（音楽学部教授：舞踊）

## ジャンヌ・ダルク

竹中幸史

フランスを訪れたなら、多くの広場や散歩道に「偉人」像が据えられていることに気づく。歴代の国王、政治家、軍人、芸術家…。こうした数多の像のうち、その姿を最も目にするのは、ジャンヌ・ダルクだろう。百年戦争末期、神のお告げのもとシャルル王太子を助けイギリス軍を撃破した功臣。その後敵軍に捕らわれ宗教裁判によって異端として火刑に処せられた乙女。このような英雄として、フランス人も我われも彼女を記憶している。しかし彼女は中世期から英雄であったのではない。それどころか、一部の地域をのぞけば、ほとんど知られぬまま、19世紀を迎えたのである。

彼女が有名になったのは、第三共和政府とカトリック教会の思惑によっていた。普仏戦争においてドイツに敗北しアルザス・ロレーヌを奪われたフランスでは、かの地を奪還すべく対独復讐熱、愛国心が煽られていた。そこで政府は命をかけて祖国を守ったジャンヌに目をつけ、次代の戦力=若者に模範的なフランス人として彼女を喧伝したのである。一方、政教分離のもとで弱体化した王党派・カトリック教会は、信徒に理想的なキリスト教徒を示し求心力を高めようとしていた。このとき国王のために戦い、神に殉じたジャンヌは格好のモデルだったのである。

こうして共和派と王党派・カトリック教会の間に同床異夢の状況が生まれた。彼女の名前は街路や広場だけでなく、お菓子や石鹸など日用品にもつけられ、各地で銅像が建造されていった。ましてやフランス共和国のシンボルはマリアンヌという女性像であったのだから、ジャンヌ像の設置は熱狂的に迎えられた。

しかしそのことは共和国を幸せにしたのだろうか。第1次大戦下、各地の愛国少女像は出征兵を鼓舞し、前線に旅立たせた。その結果、フランスだけで死者150万人、負傷者500万人（身体に障害が残った者は150万人）という未曾有の惨禍がもたらされたのである。愛国心あふれる聖処女は、どんな涙を流したであろうか。そもそも彼女は「英雄」になど、なりたかったのだろうか。

(文学部准教授：西洋史学)

ものを数多く使用しました。また、紹介したプログラムは実地調査で収集してきたものでした。

講演には7名ほどの方が参加されていました。講演後、FSCのフィールドセンターへ行ってみたいという感想を寄せてくださった方もいました。日本ではエコ・ツーリズムなど自然を体験する小旅行がブームになっていますが、自然というものを科学的な見方で解釈しようとするフィールドサイエンスは、人々の間にほとんど浸透していません。FSCが提供しているようなプログラムを体験してみることで、自然というものにとらえ方、価値観がまた変わったものになるのではないかと思います。

(人間科学部准教授：科学教育、環境社会学)

## 2009年度後期活動報告

## I 講演会・セミナー等

[前期開講分については前号を参照のこと]

## 学外講演会

会場：西宮市大学交流センター

&lt;第1回&gt; 2009年10月8日(木)

「水を考える」

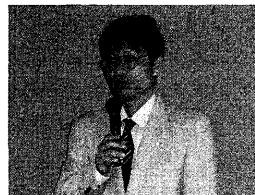
講師：張野宏也氏

(神戸女学院大学人間科学部教授：環境科学)

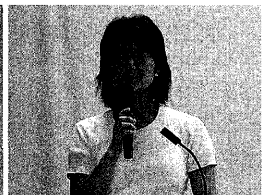
&lt;第2回&gt; 2009年11月11日(水)

「女性のためのフィールドサイエンス体験案内  
—自然に出会うイギリス小旅行—」

講師：三宅志穂氏

(神戸女学院大学人間科学部准教授：  
科学教育、環境社会学)

張野宏也氏



三宅志穂氏

## 学内報告会

2009年10月20日(火)

「『慰安婦』問題について」

主催：石川ゼミ

後援：女性学インスティテュート

会場：神戸女学院大学LA II-32

参加者：約110名

## II 研究助成

「フェミニズムと心理学」

森永康子（人間科学部教授）

## III 学会等出張補助（国内・海外）

2009年度は申請無し。

## IV 授業 Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」

Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」

Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」、Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」[主題コース]として前期後期とも本学にて開講した。

## V 学生懸賞論文（「女性学インスティテュート賞」）

2009年度（第11回）は1編の応募があり、選考結果は以下の通り。

<優秀賞>（1編）：賞金2万円（賞状）

石井優香氏

（神戸女学院大学文学部2009年3月卒）

表彰は2009年10月16日神戸女学院講堂において学院の各種記念授与式とあわせて行なわれた。

## VI 出版物

『女性学評論』第24号（2010年3月発行）

「ニュースレター」No.47（2009年10月発行）

「ニュースレター」No.48（2010年3月発行）

## — 2010年度（第12回）学生懸賞論文募集 —

賞の名称は「女性学インスティテュート賞」。対象は本学学生（学部生・大学院生）及び2009年度の本学卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文。最優秀賞論文（1編）には賞金5万円及び賞状、優秀賞論文（2編）には各2万円の賞金及び賞状が授与される。また最優秀賞論文については『女性学評論』第25号（2011年3月発行予定）に全文が掲載される。締切は2010年7月16日（金）。選考結果の発表及び表彰は2010年10月中旬の予定。詳細は当インスティテュートまで。

## — 2010年度前期講演会等のご案内 —

### ■特別講演会

日程：2010年5月28日（金） 10：35～11：25

会場：神戸女学院講堂

講師：阿古真理氏

（ノンフィクションライター・生活史研究家）

演題：「食卓から見える女性の変化」

<申し込み：不要、受講無料>

### ■連続セミナー「女性学の25年（仮題）」

開催時期：2010年6月～7月

各金曜日14：00～15：30（全4回）

場所：神戸女学院大学JD-104教室

講師・日程：未定

定員：50名 \* 3回以上の出席者には修了証を発行

<申し込み：要、受講無料>

### 女性学インスティテュート インターディシプリナリー・プログラム

「女性学インスティテュート インターディシプリナリー・プログラム」は、学生における「女性学、ジェンダー・スタディーズ」の認識を高めることを目的とし、本学で開講される科目のうち、女性学やジェンダーの視点を取り入れたものを在学期間中に「女性学（理論編）」、「女性学（実践編）」を含む10単位以上を取得した学生に、「プログラム」修了証を交付する制度です。

修了証を希望する学生は、必要単位の履修を証する書類（成績表等）を女性学インスティテュートに提出しますと、学期末に修了証が授与されます。なお、各年度において該当する科目は、年度初めに告知します。

2009年度女性学インスティテュート編集委員

谷 祝子、津上智実、鶴野ひろ子、渡部 充（委員長）  
（ABC順） 編集事務：藤岡裕美

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

URL <http://www.kobe-cac.jp/gender/>